異世界ゆるり紀行 ～子育てしながら冒険者します～ 7

Minazuki Shizuru
水無月静琉

登場人物
CHARACTER
ベクトル
タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなれる。
アルフィード
タクミ達が滞在する
ガディア国の第三王子。
タクミ・カヤノ
異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。
ジュール
タクミの契約獣となった
フェンリル。
小型にもなれる。
フィート
タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。
エレナ
水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。
アレン
水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。

第一章　社交しよう。

僕、茅野巧（かやのたくみ）は、エーテルディアという世界に転生した元日本人。

なぜ転生をしたのかといえば、エーテルディアの神様の一人である風神シルフィリール――シルが時空の裂け目を補強する際の力加減を間違えてしまい、その影響で死んでしまったからだ。それでシルが責任を感じて、お詫（わ）びとして僕を自分の眷属（けんぞく）として転生させてくれたのである。

しかし、転生してすぐに危険な森にいたり、そこで幼い子供を二人保護したりとなかなか普通ではありえない展開が連続した。二人は水神ウィンデル様の子供だったので、僕が二人を保護することをシルが狙ったのは間違いないだろう。

水神様の子供達――アレンとエレナはそれ以来、僕の弟妹として一緒に過ごしていて、とても懐いてくれている。二人がいない生活は、今となっては考えられないほどだ。

三人で冒険者としてわくわくする冒険をしたり、街でのんびりと過ごしたりして、エーテルディアの世界で着実に知り合いを増やすうちに、僕はお城で開催された夜会に参加して社交界デビューまで果たしてしまった。

その夜会では、僕達が滞在しているガディア国の第三王子であるアルフィード様——アル様と友人になったり、アレンとエレナが王太子殿下であるオースティン様の息子、ユリウス様相手に兄や姉のような振る舞いをしたり……なかなか通常ではできない体験をしたのだった。

そんな夜会から三日後。
僕達は王都にあるリスナー邸に招待されていた。
「タクミさん、よく来てくれましたね」
「セドリックさん、お久しぶりです」
「「こんにちはー！」」
僕に続いてアレンとエレナも、出迎えてくれたリスナー領主であるセドリック・リスナーさんに挨拶をする。
「アレンくん、エレナさん、こんにちは。お元気そうですね」
「「げんきー！」」
楽しそうにそう答えたアレンとエレナは、セドリックさんの息子であるテオドールくんとラティスくんのもとへ挨拶をしに行った。
その様子を見て、セドリックさんは微笑みを浮かべる。
「おやおや、アレンくんとエレナさんは以前より少し社交的になりましたか？」

「子供達なりに相手は選んでいるようですが、前よりはかなり自分達から行動するようになりましたね～」
「そうですか、やはり子供の成長というものは目を見張るものがありますね」
「ええ、本当にそうですね」
セドリックさんが言っていることは、常日頃から感じている。
今もアレンとエレナは、テオドールくんとラティスくんと一緒に楽しそうに話している。前だったら、話をしても僕の横に張り付いていたのにな～。
子供達の成長はとても嬉しいが、少し寂しくも感じてしまう。
「そうだ。セドリックさん、アイザックさんから聞いていると思いますが……承諾を得ずに僕達の後見をしてもらうことになってしまい、すみません」
以前僕達は、セドリックさんの弟であるアイザックさんに伴われて、ガディア国の王様、トリスタン様に謁見した。その時に、セドリックさんのリスナー家と、僕がお世話になった近衛騎士のヴァルト様の実家であるルーウェン家が、正式に僕達の後見になることが決まったのだ。
それ以来、セドリックさんと会うのは今日が初めてだったので、そのことを伝えると、にっこりと笑みを浮かべてくれた。
「いいえ、私は君達の後見でしたら、陛下からの命がなくても喜んで名乗りを上げますよ」
セドリックさんは僕達と出会った頃から何かと気に掛けてくれ、いろいろと対処してくれていた

んだよね〜、本当にありがたいよ。
「……ですが、先日の夜会ではその役目を果たせなくて申し訳ありませんでしたね」
セドリックさんは、ルーウェン家の当主、マティアスさんと同様に僕達の後見人を請け負っていながら、夜会では僕の側にいられなかったことを謝罪してきた。
「いいえ！　セドリックさんだって領地から出てきて挨拶回りとか大変だったでしょうし！　気にしないでください！」
僕は慌ててそう言うが、セドリックさんは首を横に振る。
「いえ、挨拶回りはいつものことなので……実は、私がタクミさんの近くにいると、先日見つかった迷宮について聞きたがっている者達が群がって、さらに囲まれてしまうことになると思いまして。それで少しタクミさんから離れていたんです」
「ああ、迷宮の……」
セドリックさんは、僕の周りに人が集まるのを避けるために、わざと夜会では顔を合わせないようにしてくれていたらしい。
確かに、新迷宮が発見された領地の領主が、王都での夜会にいたら……興味のある人間はいろいろと聞きに集まってきただろう。僕がその迷宮の発見者だということは一般には公表していないが、謁見の間にいた貴族達は知っているからな。僕とセドリックさんが一緒にいたらもっと大変なことになっていただろう。

あの時、かなりの人間に囲まれたと思っていたが……まだまだ序の口だったようだ。
「それはどうも……お気遣いいただきありがとうございます」
夜会でのひとコマを思い出しながらそう言う僕は、とても渋い顔をしていたのだろう。セドリックさんがくすくす笑っていた。
「父上、お部屋に行ってお茶にしましょう」
「アレンくんとエレナちゃんが美味しいおやつを持ってきてくれたそうです！」
その時、テオドールくんとラティスくんから場所を移動しようと声を掛けられる。
「そうですね。タクミさん、アレンくん、エレナさん、こちらへどうぞ」
「はい、ありがとうございます」
「「はーい」」
僕達がサロンに移動すると、セドリックさんの指示ですぐさま飲み物が用意される。
「あれ？」
僕の目の前に配膳されたカップに目を向けると、そこには紅茶ではなく、黄色い液体が入っていた。
こういう時に出されるのは大抵、紅茶なのだが……でも、グラスでなくカップなのだから、果実水というわけではないよな？
「私の好きなお茶の葉を手に入れましたので、それを用意させました」

「セドリックさんの好きなお茶ですか？」
「ええ、その茶葉は国外で作られているため、たまにしか入荷しないのですよ。何でも、茶葉自体は紅茶と同じですが、独自の製法で作っているんだとか。風味は少し変わっていますが、ぜひ、タクミさんにも味わってもらおうと思いましてね」
「へぇ～、それは楽しみです」
早速、僕はお茶をいただくことにする。
「ん⁉」
そして、そのお茶を飲んだ瞬間、驚きに目を見開いた。
「「おにーちゃん？」」
「タクミさん？　もしかして、口に合いませんでしたか？　独特の渋みや苦みのあるお茶ですからね。そうでしたら遠慮（えんりょ）なく言ってください。別のものを用意させますから」
僕の反応に、アレンとエレナが不思議そうに首を傾（かし）げ、セドリックさんは口に合わなかったと思ったのか心配そうにお茶の交換を申し出る。
「い、いいえ！　大丈夫です。とても美味しいです！　ただ、探していたお茶だったので驚いただけです」
僕は慌てて、セドリックさんにお茶の感想を告げる。
驚くことに、このお茶の味は、探そうとしていた緑茶――それも煎茶（せんちゃ）と似た味だったのだ！　ま

あ、渋みは強めで、色も緑がかった黄色ではなくて黄金色って言っていいくらいなんだけどね。
「セドリックさん、このお茶はどこで手に入れたんですか？」
「これですか？　産地はグレーティア国ですが、売っているお店は――」
セドリックさんに茶葉を買ったお店を聞いてみたら、なんと以前訪れたことのあるラッセルさんのお店だった！
やはり、あの大量にあった茶葉の中に、緑茶もあったのだな！
「あまり入荷しないんですよね？　まだ売っているかな？」
「そうですね。購入する人も少ないでしょうから、運が良ければ残っていると思いますよ」
セドリックさんの言葉に、僕は嬉しくなる。
「じゃあ、帰りにお店に寄ってみることにします」
「それには及びません。すぐにうちの者を確認に行かせましょう」
セドリックさんは言うが早いか、すぐに使用人さんをお店に向かわせてくれた。
「「おいしー？　のんでいい？」」
「あ～、アレンとエレナにはちょっと苦く感じるかな？」
「にがい」
「や～」
僕が茶葉を欲しがっている様子を見て、アレンとエレナは美味しいものだと思ったようで、緑茶を飲みたがった。まあ、素直に引き下がったけどね。
「父上、僕達は？」
「テオドールとラティスも、まだ苦く感じると思いますよ」
「そうですか」
「苦いのはちょっと」
テオドールくんとラティスくんも興味を持ったらしく、セドリックさんに確認していたが、やはり苦いのは嫌なようだ。
「まあ、無理に飲む必要はないさ。テオドールくん、ラティスくん、甘いおやつはどうだい？」
「食べたいです！」
「欲しいです！」
「アレンもー」
「エレナもー」
飲んでもいないのに渋そうな顔をする子供達に甘いものを食べるか聞いてみると、即座に四人が競うように手を挙げる。
「ははは～。さて、何がいいかな～？」
「ちょこれーと！」
「ぷりん！」

テオドールくんとラティスくんに何を食べてもらおうか考えていると、アレンとエレナがすかさずリクエストする。でも、自分達が食べたいものじゃなくて、テオドールくんとラティスくんに食べさせたいものを言った感じかな？

僕としては緑茶にはどら焼きとか羊羹とかがいいんだけど、それらはリスナー家の料理人でも作れるし、子供達は緑茶を飲んでいるわけではない。それに、アレンとエレナがせっかく勧めているのだから、チョコレートとプリンにしておこうか。

「タクミさん、何ですか？」

「新しい食べ物ですか？」

「そうだね。二人は食べたことがないかな～」

「うわ～、楽しみです」

「早く食べたいです！」

「そうですよ、タクミさん。早く食べさせてください」

テオドールくんとラティスくんに混じって、セドリックさんからも急かす声が聞こえるが……まあ、気にしないでおこう。

「こっちがプリンで、こっちがチョコレートです。食べてみてください」

「「「おぉ～」」」

僕がそう言っておやつを出すと、リスナー親子は歓声を上げながら、三人揃ってまずプリンから

食べ始める。

「「「美味しい！」」」

さすがは親子。感想を言うタイミングが同じだ。

三人はあっという間にプリンを完食すると、続いてチョコレートに手を伸ばす。

「「「っ！」」」

「「おいしー？」」

「「美味しいです！」」

「これはまた素晴らしいですね！」

美味しさに表情を緩ませる三人を見ると僕も嬉しくなった。

それからは和やかな雰囲気で、僕達がリスナー領を離れてからあったお互いの出来事を話し合い、あっという間に時間は過ぎ去っていった。

帰り際、アレンとエレナは寂しそうにテオドールくんとラティスくんに別れを告げていた。

まあ、セドリックさん達が領地に帰る前に、もう一度会う約束はしたんだけどね～。

あ、ちなみに、ラッセルさんのお店にお遣いに行ってくれた使用人さんは、無事に茶葉を買えたらしい。帰る時に、セドリックさんからお土産に、と茶葉を貰うことができた。

その代わりといってはなんだが、プリンと冬なので不向きだと思って提供しなかったアイスクリームのアレンジレシピを教えたら、セドリックさんは大いに喜んでくれた。

「楽しかったね」
「「うん、たのしかったー」」
僕達は日が暮れる間際の真っ赤な夕日が射す中、リスナー家の馬車に乗ってルーウェン家へ帰った。

◇　◇　◇

「タクミさん、来てくれてありがとう」
「いいえ、ご招待ありがとうございます」
今日は王妃であるグレイス様に、お城でのお茶会に呼ばれていた。
先日参加した城での夜会の他に、貴族の家で開催されるサロンパーティやお茶会の招待状が多数の家から届いているのは、マティアスさんの奥さん、レベッカさんから聞いている。そして、そのうちの何件かに出席することになるというのもわかっていた。
わかってはいたが……その招待状の中にはグレイス様からのものもあったらしい。
出席するお茶会の選別はレベッカさんに任せていたので、どこから招待状が届いていたのかなんて見なかったしな～。
今日、邸に戻ったら、断ったものも含め、届いた招待状の全てを確認しておこう。

「来たか、タクミ」
「トリスタン様も参加なされるんですね」
お茶会には招待主であるグレイス様の他に、国王のトリスタン様も出席していた。
僕、アレン、エレナ以外の招待客は、老夫婦、ご婦人にご令嬢と性別や年齢はバラバラだ。
だが、全員が自分のペットであるパステルラビットを連れている。
お茶会の会場は、パステルラビットが逃げないように柵が設置され、そこに色とりどりのパステルラビットが放されていた。これは『パステルラビット愛好家達の集い』かな？
あ、リリーカ様とシスティーナ様――僕が森から連れ帰ったパステルラビットを引き取ってくれたお嬢様も来ているな。
「「いっぱーい！」」
「そうだね。アレンとエレナもシロ達を遊ばせておいで」
「「うん」」
ここにはたくさんのパステルラビットがいるが、色や首輪を見れば自分のペットを見失うことはないだろう。
アレンとエレナは、シロ達五匹を抱えてパステルラビットの群れへ向かっていった。
「それにしても、これだけ揃っていると圧巻だな～」
「ふふっ、可愛いでしょう」

僕の呟きを聞いたグレイス様は微笑みながら、自分の膝に乗せた薄紫色のパステルラビットを撫でていた。

「パステルラビットがペットとして人気ということは聞いていましたが、こうやって見ると、本当に人気なのだと改めて実感しました」

「あら、でも、タクミさん。今回はパステルラビットを飼っている方を対象にしたからこの人数で済んでいるけれど、パステルラビットを飼いたいのに手に入らないという方はもっと大勢いるのよ？」

「え？　そ、そんなにいるんですか？」

「そうよ～。私でも飼いたいと思っても、なかなか手に入れることができなかったのだもの。だから、タクミさんが複数のパステルラビットを連れ帰って、貰い手を探していると聞いた時はすぐに飛びついちゃったわ」

パステルラビットの捕獲は本当に難しいのだと説明してくれるが、正直、僕にはその話は信じられなかった。なにせ、自ら近づいてきて、しかも逆に離れなくなってしまったのだから。

これで臆病だの、人の気配があれば隠れてしまうだのと言われても信じられるはずがない。

パステルラビットの生態について考察していると、アレンとエレナが戻ってきた。

「「おにーちゃん！」」

「アレン、エレナ、お帰り。シロ達は他の子達と仲良くできそうだったかい？」

「うん、あそんでるー」

「あとねー、ごはん、たべてるー」

シロ達は無事に他のパステルラビット達に馴染めたようだ。

ここにいるパステルラビット達は人に飼いならされているせいか、飼い主以外の人間がいる環境でもほとんど逃げ隠れはしていない。あ～、でも、数匹は物陰に隠れているか？

「「あ！　むらさきのこ！」」

「覚えている？　この子はアレンくんとエレナちゃんに譲ってもらった子よ」

「「おぼえてるー！」」

アレンとエレナは、グレイス様の膝にいるパステルラビットに気がついて寄って行くと、薄紫色のパステルラビットを撫でる。

「「なまえはー？」」

「ふふっ、この子はトリーと言うのよ」

「「トリー！　かわいーねー」」

「ありがとう」

グレイス様はパステルラビットにトリーという名前をつけたようだが……名前の由来はもしかしなくてもトリスタン様ですかね？　アレンとエレナがパステルラビットの名前を聞いた時、トリスタン様はなぜか視線を逸らしていた気がするしね～。

「タクミ、何かな？」
僕の視線に気がついたトリスタン様は、僕が考えていることを察したのか、凄みのある笑みを返してくる。
「……いえ、何でもないです」
その笑みが〝深く突っ込んでくるなよ〟と語っている気がして、僕は口を噤むことにする。
だが、名前の由来については、僕が思ったことに間違いない気がした。
「あらあら、何を話しているの？」
「なに、男同士の話さ」
「あら、そうなの？　それよりもタクミさん、あちらのお嬢さん達がタクミさんに用があるようよ」
グレイス様に指摘されて周りを見渡すと、確かにリリーカ様とシスティーナ様がこちらを窺っていた。
「僕にですか？　トリスタン様やグレイス様にではなく？」
「たぶん、タクミさんによ。でも、私達といると声を掛けられないようですから、タクミさん、ちょっと行ってきてみては？　もし仮に私達に用があるのなら、連れてきてくれればいいから」
この会場の中にいる人間で一番親しいのがトリスタン様とグレイス様だったので、挨拶をした後も何となく二人の側にいたが……普通なら王様や王妃様とこんなにも親しく話し込んだりしないよな～。
ちょうどこちらを見ているリリーカ様とシスティーナ様とは面識があることだし、二人にも挨拶しておこうか。
「そうですね。僕がずっとここにいるのも何ですし、行ってきます。アレン、エレナ、行くよー」
「「はーい。またね～」」
「ふふっ、行ってらっしゃい」
僕達はトリスタン様とグレイス様の側を離れて、リリーカ様とシスティーナ様のもとへ向かう。
「リリーカ様、システィーナ様、お久しぶりです」
「タクミ様、お久しぶりです」
「お久しぶりですわ！」
「「こんにちはー」」
「こんにちは」
「アレン様、エレナ様、お元気でしたか？」
「「うん、げんきー」」
僕から挨拶をすると、二人は笑顔で返してくれた。
「ねえ、フルールはー？」
「リアンはー？」

アレンとエレナは、リリーカ様とシスティーナ様が飼うパステルラビットの名前をしっかり覚えていたようだ。

「覚えてくれていたのですね！　フルールは元気ですよ。今はあそこで仲良く遊んでいます」

「ふふっ、リアンも元気にお友達と遊んでいます」

尋ねられたリリーカ様とシスティーナ様は、嬉しそうに自分達のペットがいる方向を示した。

「みどり～、あそこだ！」

「ええ、あの子がフルールです」

「オレンジ～、あのこだ！」

「正解です。あの子がリアンですわ」

リリーカ様の淡い緑色のフルール、システィーナ様のオレンジ色のリアンは、それぞれが別のパステルラビットの輪に入っていた。元気そうだし、僕達が連れ帰ってきた時より成長しているみたいだ。

「あ、あの……」

ちゃんと可愛がってもらえているな～……などと考えていたら、リリーカ様とシスティーナ様が同時に呼び掛けてくる。

そして、二人はお互いに顔を見合わせ、何かを確認するように頷くと真剣な表情をして僕のほうに向き直った。

「タクミ様」

「はい、何ですか？」

「私達」

「タクミ様にお願いがありまして」

「お願いですか？」

二人のとても真剣な表情に、僕は疑問を抱きながら次の言葉を待った。

「あの……タクミ様でしたら、もう一度パステルラビットを手に入れることはできないでしょうか？」

「手に入れる？　……えっと、森で野生のパステルラビットを捕獲してくるということですか？」

僕の言葉に、二人は同時に頷く。

「ええ、私の従妹もパステルラビットを飼いたがっているのですが……なかなか手に入れることが叶わなくて。私がフルールを飼い始めてからは頻繁に遊びにくるようになって楽しそうにしているものの、いつも帰り際に泣いてしまって……」

「私のほうは妹が……。リアンを欲しがってしまって……」

これは……僕がパステルラビットを譲った弊害になるのかな？

「冒険者ギルドに依頼を出してはいるのですが……あまり期待しないように言われています」

「ああ……」

　パステルラビットの捕獲依頼は、低ランクにしては高報酬だが、難易度はかなり高い。高ランクの冒険者にしてみれば、もっと稼げる依頼があるので受けることはないし、低ランクの冒険者は報酬に惹かれて受けるが、失敗するのがほとんどらしい。
「もちろん、相応の報酬はお支払いします」
「私達も無理を承知でお願いしておりますので、駄目でしたら駄目とおっしゃっていただいて構いません」
　リリーカ様とスティーナ様はそう言うけど……二人して目をうるうるさせられると、断るに断れない。
「えっと……駄目元で一度森に探しに行くだけでしたら……」
「え？」
「本当ですか⁉」
　僕の言葉に二人は一転、きらきらとした目で見つめてくる。
　その様子を見て、いまいち話についていけていなかったアレンとエレナが首を傾げた。
「「なーに？」」
「リリーカ様とスティーナ様がもう一匹ずつ、パステルラビットが欲しいんだって。森にパステルラビットを探しに行くことになるかもしれないけど、いいかい？」
「「おおー」」

　僕が伝えると、二人は楽しそうに声を上げる。
「アレン、さがすー」
「エレナ、みつけるー」
　そして、今から探しに行くかのように張り切りだした。
　そんな二人を見た僕は、リリーカ様とスティーナ様に向き直る。
「絶対に捕獲するとは断言できません。その上で、一度だけ探しに行くという条件で構わないのでしたら、お二人のお願いを叶えられるように頑張りましょう」
「もちろん、それで構いません！」
「タクミ様、ありがとうございます！」
　リリーカ様とスティーナ様は、不確定でも依頼を受けるだけで喜んだ。
　でもなんだかんだ言って、アレンとエレナの張り切りようと運の良さを考えると、パステルラビットを捕獲できる可能性のほうが高いと思うんだよな～。まあ、ぬか喜びはさせたくないから、その辺は言わないけどね。
「なにいろ」
「みつけるー？」
「色ですか？」
「えっと……」

アレンとエレナが、リリーカ様とシスティーナ様に何色のパステルラビットを見つけてくればいいのか聞くと、二人は困ったように僕を見てくる。僕は慌（あわ）てて補足した。
「色についても希望は叶えられないと思いますが……」
「その点も承知しております」
「そうですね。それに、どの色のパステルラビットも可愛いので問題ないですわ」
「それはそうですね！　どの色の子もとっても可愛いですよね」
色の希望についても、二人は承知していたようだった。それどころか、どの色のパステルラビットも可愛いと話に花を咲かせる。
「ですが一応、子供達に希望の色を教えてあげてもらえますか？　ああ、もちろん、希望の色があるのでしたら、ですけどね」
「ふふっ、タクミ様、ありがとうございます。――アレン様、エレナ様、私の従妹は黄色が好きですの。よろしくお願いしますね」
「アレン様、エレナ様、私の妹はピンクや赤が好きなので、女の子らしい色だと嬉しいですわ」
「わかったー」
アレンとエレナはリリーカ様とシスティーナ様から希望を聞くと、〝任せろ〟とばかりに胸を張る。
「まあ！　頼もしいですわね～」

「ふふっ、本当ですわね」
リリーカ様とシスティーナ様ともう少し話をしたところで、僕達はグレイス様のところに報告に戻った。遠目でもはっきりわかるくらい微笑みながら、こちらを見ていたからな。
「あら、もういいの？」
「はい。グレイス様のおっしゃる通り、二人は僕に用事があったようです」
「ふふっ。そうでしょう？　彼女達の顔がそう語っていたもの」
グレイス様は人の表情を読むのは得意だと言っていたしな～。さすがである。
「ところで、グレイス様。パステルラビットを欲しがっている人が結構いると言っていましたが、そんなに多いんですか？」
「ええ、いるわね～。あら、タクミさん、もしかして、彼女達からそのことをお願いされたのかしら？」
「そうです。まあ、完全に引き受けたわけではなく、捕獲できるかどうかはわかりませんが、一度だけ森を探してみるということで了承してもらいましたけどね」
「あらあら、それでも彼女達は喜んだでしょう？」
「ええ、まあ……」
優しいわね、とグレイス様は微笑むが、僕はただ断れなかっただけである。
それに、本当に優しい人間なら、パステルラビットを絶対に捕獲すると言って請け負っていただ

ろう。
「タクミ達ならその一度の探索で、確実にパステルラビットを捕獲してきそうな気がするのは、私だけか？」
「いいえ、私もそう思いますわ」
その時、今まで聞き役に徹していたトリスタン様が予想を口にし、それにグレイス様も同意する。
「……」
僕もさっき〝アレンとエレナなら……〟と思ってしまったので、否定も突っ込みもできないんだよな〜。
「がんばるのー」
「みつけるのー」
黙り込んだ僕の横でアレンとエレナが、トリスタン様の言葉を肯定するように宣言していた。
「おぉ、やる気満々だな。頑張ってこい」
「あらあら、二人とも頼んだわね」
「「うん！」」
トリスタン様とグレイス様から激励を受け、アレンとエレナは満面の笑みを浮かべるのだった。
その後、アレンとエレナはパステルラビットの群れに飛び込んでいって、シロ達や他のお茶会参加者が連れてきたパステルラビット達と戯れていた。
パステルラビットを撫でたり愛でたりしていたお茶会参加者達は、いつの間にかうちの子達とパステルラビット達が戯れる様子を観賞するようになっていた。

◇　◇　◇

「あっ、ひょうかそうだ！」
「こっちにもある〜」
「氷華草が生える時期とはいえ、これはまた凄いな〜」
翌日、僕達は早速、パステルラビットを探しに森へ来ていた。
だがそこで、アレンとエレナはパステルラビットではなく、氷華草の群生地を見つけたため、次々と採取し始めてしまった。
《お兄ちゃん、お兄ちゃん！　こっちには氷雪花が咲いているよ！》
《採るの！》
《兄上、こちらにはレモネーの実がたくさん生っています》
《ボルト、木から落としてちょうだい。私とベクトルで受け取るわ》
《うん、オレとフィートに任せろ！》

僕の契約獣であるフェンリルのジュールにフォレストラットのマイル、サンダーホークのボルト、飛天虎のフィート、そしてスカーレットキングレオのベクトル達も薬草や果実を見つけると、みんなで協力し合って採取と収穫をしていく。
「……おーい。今日の目的は採取じゃないぞ～」
《わかってるよー》
「「ぱすてるらびっと～」」
《兄上、少しだけ待ってください。すぐ終わらせますから》
アレンとエレナ、ジュールが発見したものに夢中になるのはいつものことだが、今回はボルトまでもが一緒になっていることに僕は少し驚いた。
《あら、ボルトにしては珍しいわね？》
いつの間にかフィートが僕の隣に並んで、僕と同じくボルトの行動を珍しがっていた。
「フィートもそう思うか？」
《うん。もしかして、ボルトってレモネーの実が好きなのかしら？》
「なるほど、それはあるかもしれないな」
好きなものだからたくさん採りたい、ということも考えられる。
そういえば、ジュール達みんなの好きなものって気にしていなかったよな～。
契約獣になると魔力でエネルギーを補給するので普段の食事は必要ないらしいが、以前は普通に食事をしていたはずだ。
それならば、みんなにだって好物はあったよな～。聞いておけば良かった。
「というか、フィートもレモネーの実を受け取っていたんじゃなかったのかい？」
《ベクトルが頑張っているから任せてきたの。ほら、あれ》
「ん？」
フィートに促されてベクトルを見れば、木の周りを素早く駆け回り、ボルトが落としたレモネーの実を咥えた籠で見事に受け取っていた。かなり速いテンポで実が落とされ続けているのだが、ベクトルは一つも零さずにいる。しかも、とても楽しそうだ。
「ああ、確かにあれならベクトルがいれば問題なさそうだな」
《でしょう？　だから、私は無理に参加する必要はないと思って》
「そうだな。じゃあ、フィートは僕と一緒にいよう」
《うん！　兄様を独り占め～♪》
しっかり者のフィートが甘えてくるので、僕は撫でてあげる。するとフィートは、嬉しそうに喉を鳴らした。
しばらくフィートを撫でていると、氷華草の採取を終えたアレンとエレナが飛び込むようにして戻ってくる。そして、撫でろと言わんばかりにすり寄ってきた。
そんな二人を撫でていると、今度は氷雪花を採取していたジュールとマイルが戻ってくる。

《混ぜてー》とジュールが飛び込んでくれば、全員があっけなく転倒。今は元の大きい姿だからね～。まあ、みんなに怪我がなくて良かったよ。
アレンとエレナが〝お返し〟とばかりにジュールにじゃれついていた。
そして最後に、大量のレモネーの実が入った籠を咥えたベクトルと、満足そうなボルトが戻ってくる。
《兄上、お待たせしてすみませんでした》
「まあ、そこまで時間を取っていたわけじゃないから大丈夫さ」
僕の肩にとまったボルトに、気にするなと伝えながら撫でる。ベクトルは僕の目の前に素早く籠を置くと、じゃれ合っている子供達に混ざりにいった。いや、あれは突撃していったと言っても過言じゃない。
「それにしてもたくさん採ったな～。ボルトはレモネーの実が好きだったりするのかい？」
《はい！　甘酸っぱくて好きです！》
「ああ、やっぱりそうだったんだな～」
やはり予想した通りだった。
「言ってくれればいつでも用意したのに」
《ぼく達契約獣は、基本的に食事は必要としないところを兄上のご厚意でいただいているわけですし……これ以上、兄上の手を煩わせるわけには……》

ボルトの言い分を聞いて僕は驚愕した。真面目な性格だとは思っていたが、そこまで考えていたなんて思ってもみなかった。
「何を言っているんだよ、ボルト。そもそも、その食事に使う食材やお金は、みんなが頑張ってくれるお陰で手に入っているんだよ？　だから遠慮することなんてないんだ」
《ですが……》
「無理して僕の作った料理を食べているっていうことはないよな？」
《そんなことないです！　いつも楽しみにしているんです！》
「そうか、良かった。作った料理を喜んで食べてくれたら、僕は嬉しいんだ。だから、食べたいものがあったらどんどん言ってくれ」
やはり料理というものは、食べる相手が喜んでくれると作り甲斐が出てくるからな～。
「まずは手始めに、このレモネーの実を使っておやつでも作ろうか」
《本当ですか!?　嬉しいです！　兄上、ありがとうございます！》
僕の提案に、ボルトはとても喜んだ。
《ボルトだけずる～い》
だが、そこでジュールが不満そうな声で訴えてくる。
「こらこら、ジュール、拗ねるなよ。ちゃんとジュールの好きなものも作ってあげるから」
《本当っ!?》

「本当だよ。みんなの好きなものを使って作るから。ただ、一度には無理だから順番にね。みんな、食べたい料理か、好きな果実とか木の実、肉とかでもいいから、好きな食材を考えておくんだよ」
《わーい。楽しみ〜》
《嬉しい。兄様、ありがとう》
《オレ、肉〜♪》
《楽しみなの！》
ジュール達は無邪気に喜び、〝あれがいい、これがいい〟とお互いに食材名を出し合っていた。
「アレンはー？」
「エレナはー？」
仲間外れが嫌だったのか、アレンとエレナが自分達もと主張してくる。
「アレンとエレナもいいけど……二人にはいつも食べたいものを聞いているだろう？」
「えへへ〜」
そう指摘すると、二人は笑って誤魔化した。なので、アレンとエレナの頭をぐしゃぐしゃと混ぜるように撫でれば、二人はきゃっきゃっと笑う。
「さて、そろそろちゃんとパステルラビットを探すぞー」
「《《《《おー》》》》」
本来の目的からかなり脱線してしまったので改めて号令を掛けると、みんなが元気に返事をしてくれる。
「あっちー」
「いくー」
アレンとエレナが教えてくれるパステルラビットがいそうな方向を目指して、僕達は森の奥へと進む。
《ねえねえ、お兄ちゃん》
「ん？　ジュール、どうしたんだ？」
《あの花って……薬草だっけ？》
少し歩いた先でジュールが白い花を見つけ、自信なさげに聞いてくる。
「ん？　ああ、あれはカモミール。ハーブの一種だな」
《ハーブ？　食べられるの？》
「お茶に使うんだ。あとは……香料とかにも使われたはずだな。えっと……リラックス効果があるんだったかな〜？」
《じゃあ、使えるんだね？　ボク、採ってくる！》
カモミールが何かに使えるものだとわかると、ジュールはあっという間に駆け出していく。
「アレンもー」
「エレナもー」

アレンとエレナも負けじとジュールを追いかけていった。

「ああ～、また脱線して～」

食べられるもの、使えるものを見つけるとどうしても回収したくなるのが、うちの子達らしい。

出かけるたびに僕の《無限収納（インベントリ）》の中身が確実に充実していく。

まあ、僕も結構収集癖（しゅうしゅうへき）があるので人のことは言えないけどね。

「ほどほどにするんだよ～」

「「《は～い》」」

とりあえず、採り過ぎることのないように注意すると、元気な返事だけが聞こえた。

《兄様、止めなくて良かったの？》

フィートがそう言いながら見上げてきたので、僕は苦笑する。

「ああ、時間が足りなければ一晩野営してもいいからね。寒い時期だけど、それに耐えられるだけの備えはあるし、フィート達にくっついてもらえれば暖かいだろうしな」

《ふふっ、それなら任せて。兄様達に寒い思いなんてさせないわ》

「お願いな。まあ、それにパステルラビットは見つけられなくても大丈夫だからね」

《あら、兄様ったらそんなこと言って～。見つけられない可能性はあまり考えていないでしょう？》

「……まあ、そうだね」

フィートと話していると、カモミールを摘みに行ったアレンとエレナがある一点を凝視（ぎょうし）していた。

「「いたっ！」」

おっ、アレンとエレナが何かを発見したみたいだな。

二人の視線の先を見てみれば、そこにいたのはなんと、パステルラビットだった。

《お～、いたね～》

《あら、本当。白い子だわ》

《見てなの！　奥にもまだいそうなの！》

《確かに二、三匹いますね》

《えぇ～、どこ～？　見えなーい》

ジュール、フィート、マイル、ボルトも気づいたようだ。ベクトルは見つけられないみたいだが。

アレンとエレナにかかれば、あまり見かけないはずのパステルラビットも簡単に見つかってしまった。しかも、どうやら一匹だけではないらしい。

「「つかまえるー？」」

「そうだな。でも、捕まえに行くならアレンとエレナかな？　さすがにジュール達が近づいたら、パステルラビットは逃げちゃうだろうし」

《そうだね～。ボク達は、マイル以外は捕食者（ほしょくしゃ）のほうだからね～》

「「わかったー」」

狼（おおかみ）に虎（とら）、獅子（しし）に鷹（たか）は、いずれもウサギにとっては恐怖の対象だろう。

「「おいで～」」
アレンとエレナは数歩前に出てから、屈んでパステルラビットに向けて優しく声を掛ける。
すると、茂みに隠れていたパステルラビットがひょっこり顔を出した。
「……何でだ？」
《あら、出てきたわね？　さすが、アレンちゃんとエレナちゃんね！》
思わず疑問を零した僕とは違って、フィートはアレンとエレナを褒め称える。
人間だってパステルラビットにとっては恐怖の対象なのにな、どうして逃げずに出てくるんだろな？
《わ～、アレンとエレナってば凄～い》
《不思議ぃ～》
《アレンとエレナだからですかね？》
《それ、凄く納得できるの！》
ジュール、ベクトル、ボルト、マイルも感心したように子供達を見ていた。
「「いいこ～」」
白いパステルラビットはいつの間にか、アレンとエレナのもとまで出てきていて、二人の手にすり寄っていた。
「……青いのと黒いのも出てきたな～」

撫でられる白いパステルラビットが羨ましかったのか、青と黒のパステルラビットが、それはもう一生懸命にぴょこぴょこ跳んで子供達のもとへ行く。
《わ～、一直線にアレンとエレナのところに行ったね～》
《さすがなの～》
ジュールとマイルは感心を通り越して、若干呆れた声を出していた。
アレンとエレナは増加した二匹も満遍なく撫でると、アレンが白と青い子、エレナが黒い子を抱き上げて戻ってきた。
「「ただいまー」」
「おかえり。見事に懐いているな～」
〝こちらに来る＝捕食者達がいる〟ということであるにもかかわらず、パステルラビット達は落ち着いた様子で、アレンとエレナの腕の中で鼻をひくひくさせている。
《全然、怯えていないわね？》
フィートは、エレナが抱いている黒いパステルラビットに顔を近づけるが、パステルラビットは平然としている。
《本当だ～》
『がる～ん』
ジュールとベクトルもアレンが抱くパステルラビットに近づくが、パステルラビット達は本当に

全く動じなかった。
「……感覚が鈍いんだか、度胸があるんだかわからないな〜」
《兄上、これで依頼達成ですか？》
「ん？　あ〜、そういうことになるかな？」
どんな色のパステルラビットでも二匹確保できれば良かったので、パステルラビット捜索はこれで終了しても問題ない。
「きいろはー？」
「あかはー？」
だが、アレンとエレナは、リリーカ様とシスティーナ様に指定された色のパステルラビットを探さないのかと訴えてきた。
「絶対に黄色や赤じゃなくてもいいんだぞ？」
「えぇ〜」
「でも〜」
……探したいようだ。
我儘、というよりは妥協したくないのかな？
「わかった、わかった。森に入ってからそんなに時間も経っていないことだし、もう少し探してみようか」

「「うん、さがすー」」
アレンとエレナの訴えを了承すると、二人は満面の笑みで万歳をした。
「ほら、三匹をここに入れな」
「「は〜い」」
僕は《無限収納》から籠を取り出し、アレンとエレナにパステルラビット達を入れさせる。ついでに野菜くずを入れてあげると、三匹は飛びつくように食べだした。
「おなか〜」
「へってる？」
「……そうみたいだな」
冬だから餌に困っていたんだろうか？　いや、でも、周りを見る限り、草や木の実が全くないというわけではないのだけどな〜。
「まあ、野菜ならいくらでもあるからいいさ。ほら、どっちに行くんだ？」
「「んとねー……あっちー！」」
アレンとエレナに行きたい方向を聞くと、山のほうを指した。
「あっちだな」
「「うん！」」
僕達は再度、パステルラビットを探して森の奥へと進む。そしてしばらく進むうち――

《あそこに赤い花がある～》
《あれは紅仙花ね。ジュール、珍しい花を見つけたわね》
「これー」
「ひかげそう？」
《本当ですね。日陰草で間違いないです》
《兄ちゃん、これ美味しいやつだ！》
《ベクトル、雪豆なの！　採るの！》
子供達は次々と薬草や食材を見つけて採取していく。
「あっ！」
「いた！」
しかも、しっかりとパステルラビットも見つけ、黄色と紫色の二匹を捕獲していた。
「あ～か～♪」
「ピンク～♪」
「いないかな～♪」
「でておいで～♪」
黄色のパステルラビットを見つけたアレンとエレナは、ご機嫌に歌いながら次のパステルラビットを探すのだった。

パステルラビットを探しつつ、森の深くへと進んでさらに山を登って行くと、かなり寒さが増してくる。
「うわっ！　ここは一面、雪景色だな～」
「ふわふわ～」
「これなーに？」
「雪だよ。雪」
「「ゆきー？」」
ガディア国では冬でもあまり雪は降らないと聞いていたが、標高が高く気温が低いからか、二、三十センチくらいの雪が積もっていた。
「「つめたーい」」
アレンとエレナは雪を見るのが初めてなので、不思議そうにしながらしゃがみ込んで雪を触っている。
「冷たいだろう？　ほら、マフラーを巻いて、手袋をはめておきな」
素手で雪を触って手を真っ赤にさせているアレンとエレナに、僕は慌てて防寒具を身につけさせる。
本当にレベッカさんに感謝だな。着ぐるみを作ってくれた時にいろいろと注文したものがとても

役に立っている。

「「うにゃっ！」」

すると突然、アレンとエレナの顔を目掛けて雪が飛んできた。

《隙あり～》

『がる～ん♪』

ジュールとベクトルが前足で雪を投げ飛ばしたようだ。

「「ほりゃ～」」

お返し、とばかりにアレンとエレナも両手ですくった雪をジュールとベクトル目掛けて投げる。

《当たらないよ～》

《残念～♪》

しかし、ジュールとベクトルは子供達の行動を読んでいたのだろう、やすやすと雪を避けていた。

「「あぅ～」」

「アレン、エレナ、雪をこうやってぎゅっとして丸く固めるんだ」

「「おぉ～」」

悔しそうにするアレンとエレナに雪玉を作ってみせると、二人は感心したような声を上げる。

「「そりゃー」」

そしてその雪玉でどうするかを理解したアレンとエレナは、すぐに雪玉を作ってジュールとベク

トル目掛けて投げつけた。

《うわっ！　それ、ズルい！》

《危なっ！》

ジュールとベクトルは高速で飛んでくる雪玉をギリギリで避ける。

「「むぅ～」」

「アレン、エレナ、くれぐれも本気で投げるなよ。二人が本気で投げたら、ジュールとベクトルでも重傷になる」

「「は～い」」

雪玉も避けられ、ますますやる気を漲らせるアレンとエレナ。そんな二人に、ほどほどにと注意すると、元気の良い答えが返ってきた。

《ちょっと、お兄ちゃん！　止めないの!?》

「最初に雪を掛けたのはジュールとベクトルだしな」

《《えぇ～》》

アレンとエレナの様子を見てジュールとベクトルは慌てだす。

《ジュールとベクトルったら、悪戯好きなんだから～》

《子供なの！》

《そうですね》

フィート、マイル、ボルトは、呆れたように首を振っていた。
《それにしても、アレンちゃんとエレナちゃんは楽しそうね》
《はい、嬉々として追いかけていますね》
《でもでも、ジュールとベクトルが凄い勢いで逃げているの〜》
ボルト達は、アレンとエレナが雪玉を作っては、ジュールとベクトルを追いかけて投げる様子を微笑ましそうに見ている。
「やぁー」
「ほいっ！」
《ちょっと、アレン!?　それは剛速球すぎるよぉ!?》
《わ〜、エレナ〜。少し手加減してよ〜》
雪玉が作れないジュールとベクトルが防戦一方になるのが面白いのか、アレンとエレナは本当に楽しそうである。
《容赦ないよ〜》
《やられた〜》
ジュールとベクトルは全力で逃げ回っていたが、しばらくすると降参して雪の上に倒れこんだ。
「「かったー！」」
そんな二匹を見て、アレンとエレナは朗らかな表情を浮かべていた。

《ねぇ〜、兄ちゃん、兄ちゃん》
すると突然、力なく腹這いになっていたベクトルが鼻をひくひくさせる。
「ん？　ベクトル、どうかしたか？」
《なんか、この下から良い匂いがする〜》
「匂い？　雪の下に何かが埋まっているのかな？」
《そうみたい！　オレ、掘ってみる！》
がばり、と勢いよく起き上がったベクトルは、その場の雪を掘り始める。
「「なーに？」」
「何か良い匂いのものがあるんだって」
ベクトルの行動を見て、全員が周りに集まってくる。
《本当だ。良い匂いがする〜》
《そうねぇ〜》
《これだ！》
ジュールとフィートも辺りの匂いを嗅ぎ、同意する。
しばらく様子を窺っていると、ベクトルは雪の下から十数センチほどの青白いキノコを掘り出した。
「ユキシタ茸だ。また珍しいキノコを見つけたな〜」

ユキシタ茸は、その名の通り雪の下で成長するキノコである。
積雪が少ないと成長しないという特殊な生態で、大量の雪が積もってしまえば掘り出すのが厄介になるため、あまり市場には流れない品だ。
旨味がたっぷりで蕩けるような食感ということもあって、高級品として扱われている。
冒険者ギルドにもユキシタ茸の採取の依頼書があったはずだが、確か……Bランクとわりと難易度が高かったっけ。
《見事に真っ二つだけどね～》
《勢いよく掘り過ぎたわね～》
《価値が半減です》
《残念なの～》
『……がる～ん』
しかし、掘り出されたユキシタ茸を見たジュール、フィート、ボルト、マイルが口々にそう言うので、ベクトルが見るからに落ち込んでしまっていた。
容赦ないな～。
「こらこら、みんなしてそんなに責め立てるなよ。ベクトル、調理する時に切るし、半分に割れていても問題ないから。見つけてくれてありがとう」
『がるんっ！』

僕が頭をポンポンと軽く叩いてやると、ベクトルは僕のお腹に頭をぐりぐりと擦りつけてきた。
アレンとエレナもこちらに寄ってきて、ベクトルを撫でてあげる。
《確かに食べる時は切るもんね～》
《そうね。形は関係ないわね》
《はい。売るのでなければ問題ないですね》
《それにそれに、まだここら辺にはユキシタ茸があるかもなの！》
僕とアレン、エレナがベクトルを慰める様子を見て、みんなは慌てて言い繕う。
こちらをチラチラと見てくるのは、僕が怒っていないか気にしているからかな？
「……怒ってないぞ？」
ぼそりと呟いてみたら、みんなは安堵した様子を見せた。
やはり、気にしていたようだ。
そしてその後、子供達は仲良くユキシタ茸を掘り出し始めた。
ここら辺はユキシタ茸の生育の条件に当てはまりつつも、掘り出せないほど雪が積もっているわけでもなかったので大量に採取することに成功したのだった。
……雪とキノコに気を取られてパステルラビットを探すのを忘れていたけどね～。
「すっかり夢中になってしまったな」

ふと気がつくと日が沈みかけて、夕方になっていた。
「ジュール達に全力で走ってもらえば閉門までには間に合うか？」
「あかはー？」
「ピンクはー？」
急いで帰るべきか考えていると、アレンとエレナはまだ赤、もしくはピンクのパステルラビットを捕まえていないと訴えてくる。
《泊まろう！》
《それがいいわ！》
ジュールとフィートも野営しようと主張した。
《オレ、ベッドになる～》
《みんなで固まっていれば寒くないの！》
ベクトルは、寝る時は自分に埋もれれば良いと言い、マイルも後押しする。
最初は一晩野営してもいいと思ってたけど、目標は達成しているので、わざわざする必要はないんだよな～。
「寒さに耐えられるだけの装備はあるけど、さすがに夜空の下は寒いことには変わらないぞ？」
先ほどの場所と違って、ここは一面雪が積もっているのでかなり寒いだろう。
《じゃあ、ぼく、滞在できそうな洞窟を探してきます！》

僕の言葉に、ボルトはすぐさま飛んでいった。
……僕が「帰るぞ」と言う前に、という感じだな。
「も～、仕方がないな～」
ボルトならきっと手頃な洞窟を探して帰ってくるはずだ。それなら夜空の下よりましになるだろうし、あとはジュール達の毛皮に頼ればいいか。
「この寒い時期に連泊はしたくない。明日には街に帰るからな」
「《《《《は～い》》》》」
子供達とジュール達は元気よく返事をする。その時、子供達は顔を見合わせ、〝やった〟という表情をしていた。
みんなの連携といい、こういう展開を狙っていた……とか？　……いや、まさかね。
しばらくして戻ってきたボルトに誘導されて、僕達は洞窟へと向かう。
「広さも奥行きもちょうどいいな」
《良かったです》
洞窟の中は、寝る時にベクトルが大きくなっても窮屈ではなく、だからといって広すぎることもない。ほのかに暖かいし、ここでなら寝ても子供達が風邪を引く心配はないだろう。
「寝るところも決まったことだし、ご飯にしよう。せっかくだから、ユキシタ茸を使って鍋にでも

立ち読みサンプル
はここまで